

極小理論におけるパラメターの位置づけ

阿 部 潤

本稿では、チョムスキーが提唱する極小理論 (Minimalist Theory) において、言語間の差異を捉える装置であるパラメターの位置づけを考察する。Chomsky (2004) では、極小理論がいわゆる「説明的妥当性」を超越したより深いレベルの説明を模索するのを最大の目標とすることが述べられている。即ち、普遍文法の中身がどんなものであるのかという問いから、何故そのような姿になったのかという問いへの移行である。この後者の問いに対して、チョムスキーは、普遍文法の進化過程には、ダーウィン流の偶発的な自然淘汰の影響はほとんどなく、自然科学全般に認められる一般原理 (特に計算処理システムの最適性及び効率性など) と、認知システム全体の中で言語能力と直接結び付いていると想定されている感覚運動システムや概念・意図システムから要求される「インターフェイス条件」によって説明できるであろうとの仮説を立てている。この仮説を Chomsky (2004) は、“strong minimalist thesis” (以下、SMT と呼ぶ) と名付けている。本稿では、この仮説の下で、何故普遍文法はパラメターという装置を備えるに至ったのかという問題提起をし、その答えを探る可能な方策として、以下の二点を主張したい。

- 1) パラメターの存在を説明するには、インターフェイス条件をチョムスキーが想定しているいわゆる「判読可能性条件」(legibility condition) よりもより広範な条件と捉え直す必要がある。
- 2) パラメターは、上で広義に解釈されたインターフェイス条件を適え

極小理論におけるパラメターの位置づけ

るために、言語能力 (faculty of language, 以下, FL と呼ぶ) が取りうる最適な選択肢が複数 (基本的には二つの場合を以下想定している) ある場合に生じている。

以下この二点に沿って述べられることは、パラメターが極小理論の中にどう位置づけられるかという問いに対する一つの可能な考え方を示唆するものであり、例えば、普遍文法が如何に進化を遂げてきたのかという問いに対して実証的説明を試みるというようなものではないことを予め断っておく。極小理論が目指すものは、SMT のように言語進化に対するある特定のスタンスを踏まえた上で、あくまでも普遍文法の中身の姿を問題にするのであり、直接言語進化の問題を取り扱う段階にまでは至っていないと思われる。

本稿では、上にまとめた二点を主張するのに、次の二つのパラメターを例として扱う。

- 1) 主要部パラメター (Head Parameter)
- 2) 格・一致パラメター (Case vs. Agreement Parameter)

この二つのパラメターを取り上げる理由は、上記の二点を例証するのに適しているというに留まらず、現在統語論の中心的話題に上っている争点に対して、ある示唆を与えることも狙いとしている。その争点とは、以下の二点である。

- 1) 主要部パラメターは存在するのか。
- 2) 自由語順という現象を統語論でどう扱うべきか。

前者については、Kayne (1994) がこのパラメターの存在を否定して以来、Fukui and Takano (1998) など多くの学者がこの見解を支持する議論を繰り返して、今や主要部パラメターを支持する者は少数派となってしまった感があるが、本稿では、極小理論において主要部パラメターをどう位置づける

極小理論におけるパラメターの位置づけ

ことが可能であるかを考察することにより、このパラメターに間接的な支持を与えることを目論んでいる。後者については、自由語順をスクランプリングと呼ばれる移動規則によって捉えるのが標準的な考え方となっていると思われるが、このスクランプリングが統語部門の中核となる計算処理部門 (computational component) で働くのか、それとも PF に至る音形化の過程で適用する “stylistic rule” の一種として働くのかについては、議論が続いている。経験的議論に基づけば、スクランプリングを計算処理部門で働く移動の一つの現れと考えるのが妥当と思われるが、概念的・理論的議論に基づくと、チョムスキーが提案する「移動には常にそれを引き起こす形態素性が伴う」という強力な仮説の影響で、そういった引き金となる素性を持たない操作としてのスクランプリングを計算処理部門から追いやることが、理論的により望ましいという考え方が優勢である。本稿では、それとは真っ向から対峙する考え方を提示したいと思う。即ち、インタフェイス条件をより広義に捉え直すことで、スクランプリングを計算処理部門に位置づけることが極小理論の下で自然に行われうることを示す。そして、この操作が何故ある言語では広範に用いられているのに対して、他の言語ではそれが認められないのかという問題を、上掲の格・一致パラメターに基づいて説明を試みたいと思う。

1 極小理論の狙いと争点

極小理論が狙いとするところのものは、Chomsky (2004) の以下の引用に集約されていると思われる。

“We can seek a level of explanation deeper than explanatory adequacy, asking not only *what* the properties of language are, but *why* they are that way.” (p. 2)

これまで生成文法理論が目指してきたところのものは、人間が生得的に備えていると考えられる FL の特徴とはいかなるものであるかを解明することであった。主に「刺激の貧困」(poverty of stimulus) の議論に基づいて、大人が獲得したと思われるある言語知識の出所を考察した場合、それが以前想定されていたよりもはるかに多く生得的知識に帰せられることが実証されてきた。そして、その生得的知識がある一定の経験にさらされることで如何にある個別言語の知識へと写像されるのかといった問題を体系的に捉える仕組みとして提唱されたのが、原理・パラメターモデル (Principles and Parameters Model) である。この段階に至って、生得的知識の中身がかなりの程度「原理」という形で特徴づけられ、また刺激の貧困にも関わらず、言語間で体系的な差異が生じている事実を、「原理の中に含まれる未指定のパラメターをセットする」という形で捉えることが可能になった。よく引きあいに出される以下の言語獲得モデルに基づいて言い直せば、

- (1) Initial state S_0 → primary linguistic data (PLD) → attained state (I-language, L)

言語知識の初期状態は、原理の束とそれに付随する未指定のパラメターとから成り、ごくありふれた言語経験 (PLD) を与えられれば、未指定だったパラメターの値が決定され、これにより言語知識の獲得状態に写像されるとするのが、原理・パラメターモデルの基本的な考え方である。この考え方に従えば、言語知識の主要部分はその初期状態に帰することができる、言語経験は単にパラメターの値を決定するための「引き金」の役目を担うに過ぎないことになる。

上のチョムスキーの引用の中に出てくる説明的妥当性 (explanatory ade-

quacy) とは、ある大人が持っている言語知識の中身がどんなものであるかを特徴づけるに留まらず、そのような知識が如何にして身に付けられたのかを解明できた場合に満たされる説明レベルのことを言う。上で述べた原理・パラメターモデルがまさにこの説明的妥当性を満たすために考案されたモデルである。上の引用では、この説明的妥当性のレベルを越えて、言語知識の初期状態の中身がどんなものであるかを特徴づけるに留まらず、何故そのような初期状態が人間に備わるに至ったのかを考察する可能性が示唆されている。この説明レベルでは、(1) に掲げられた言語獲得モデルにおいて、入力 (PLD) と出力 (attained state) を関係づける既定の装置と見なされていた S_0 が出力として位置づけられる言語進化のモデルが問題となってくる。(1) と並行的に捉えれば、以下のようなモデルを想定することができよう。

(2) Origin of S_0 → linguistic environments → S_0

このモデルにおいて、「 S_0 の起源」と見なしうるものは、Chomsky (2004) の考え方に従えば、この S_0 が人間の一生物器官として言語の機能を果たすために最低限必要とされるもののことを指すことになる。ここで一つ注意を喚起しておくとして、この「言語進化のモデル」は実際に言語が如何に進化してきたのかを時系列的に捉えることを想定しているのではなく、 S_0 の中身の出所を言わば言語進化の軸上で明確に区別立てすることを目論んでいる。Chomsky (2004) に従えば、 S_0 の起源の中身は以下の二つの条件から生み出されてくるものと考えることが出来る。

(3) i) the effect of general principles (physical, chemical, mathematical)

ii) interface conditions (IC)

(3i) の条件とは、自然界に存在するものであれば当然期待される物理的、化学的、数学的特徴など自然科学全般から導き出される条件である。いわゆる 17 世紀の「科学革命」以後信じられている「自然は（ある意味で）完全なシステムであり機械論的に把握可能である」という信念の下に、自然界の構成物の成り立ちがあたかも「機械仕掛けの時計」のように、ある一定の規則的なメカニズムから成り立っているとするのが今日の標準的な科学的態度と思われるが、この考え方の下では、「 S_0 の起源」なるものも、物理的、化学的、数学的に見て、ある一定の規則的なシステムをなすと想定できるような特徴を具現していることが期待される。これに対して、(3ii) の条件とは、 S_0 に対するより個別的な条件で、この言語器官がより包括的な認知システムの中でどのように他の器官と関わっているかを考察することから導き出される生物学的条件のことである。 S_0 のインターフェイス条件を Chomsky (2004) は、以下のように述べている。

- (4) The information in the expressions generated by L must be accessible to other systems, including the sensorimotor (SM) and conceptual-intentional (C-I) systems that enter into thought and action. (p. 2-3)

この条件が言わんとするのは、言語器官 L (=FL) で生成された「言語知識」の表示物はそれに隣接する認知システムに対して「判読可能」でなければならないというものである。もし判読可能でなければ互いのシステムの相互作用はあり得ないことになるので、言語器官がそれ自体他と全く孤立したシステムと見なすのが妥当でない限りにおいて、このインターフェイス

条件は妥当と思われる。FLの働きが、発話の知覚の場合であれ産出の場合であれ、言語音をそれが表す意味と結びつける仲立ちをすることであるとすれば、この器官が音声を司るシステム（チョムスキーの用語では SM System）と意味を司るシステム（チョムスキーの用語では C-I System）に隣接するものとするのは自然である。従って、言語器官はこれらのシステムに対して判読可能な表示を提供することがその条件として求められることになる。

以上述べた二つの条件が、 S_0 の起源の中身を規定するもの、即ち、 S_0 が人間の一生物器官として言語の機能を果たすために最低限備えていることが期待される特徴を規定するものと言える。これに加えて S_0 の中身を規定するものとして想定されるのが、(2)のモデルで言えば、“linguistic environments”から得られたものである。これは、Chomsky (2004)の用語を使えば、“path-dependent evolutionary processes”によって得られたものと言える。これは、言語進化の途上で、 S_0 が(3)の要件とは別個に獲得した偶然の特徴を指す。これは、生物の進化をダーウィン流の自然選択に基づいて説明を与える際には、中心的な要素を成すものとみなされるものである。例えば、ある生物体が飛ぶという特徴を身に付けるに至ったのは、たまたま体温の調節機能として用いられた薄い膜状のものが、ある偶然的な出来事を契機として（例えば、風によって飛ばされる）、それが種の保存に有利に働くことになり、飛ぶという機能を備えた「羽」として進化したためであると言った場合が、“path-dependent evolutionary processes”によって得られた特徴の一例と言える。それでは、 S_0 の中身を規定するものとして、この進化上の偶然の賜物と言えるものがFLに存在するであろうか。また、存在するとした場合、どのような特徴がそれに相当するであろうか。

Chomsky (2004) はこの進化上の偶然の賜物が FL には存在しないであろうという仮説を立て、これを SMT と名付けている。この仮説を背後で支える信念は、人間が備え持つに至った FL が、上例の「飛ぶ」という機能とは異なり、ある突然変異を契機として、FL の原始的状態から、種の保存に有利に働くことによって、自然選択により、徐々に現在の姿に進化してきたとは考えにくいというものである。生成文法理論の一つの大きな貢献は、FL が備える諸特徴が以前に考えられていた以上に複雑精巧に出来上がっているということであり、これほどのものが自然選択の力で出来上がったとするにはあまりに精巧すぎると考えるのは、説得力があると思われる。極小理論では、この進化上の偶然の賜物が言語器官には存在しないであろうという仮説の下で、 S_0 の中身を規定するものとして、(3) に掲げた条件によってどれだけ適切に S_0 を特徴づけられるかを検証するのが最大の目的と言える。このように見えてくると、当然以下の疑問が浮かんでくる。

(5) 何故パラメターが存在するのか。

以下の節でこの問題を考察していく。

2 機能的有用性条件

前節の議論から、もし SMT が正しいと仮定すると、 S_0 の姿としては、パラメターなしの単に原理の束からなるシステムが出来上がっていることが期待されてもおかしくないであろう。というのは、SMT の下では、 S_0 は、(3) に掲げた二つの条件、即ち自然界の存在物であれば当然従うであろう「一般的諸原理」とインターフェイス条件からその諸特徴を規定できると

するものであり、この二つの条件には、一見すると、パラメーターなる装置が介在する余地はなさそうに思われるからである。どちらかと言うと、このパラメーターなるものは、「進化上の偶然の賜物」と考えるほうがより妥当のようにも思われる。というのは、パラメーターは言語間の差異を捉えるための装置であり、この差異が生じた理由を進化上の偶発性に帰するのはごく自然のことと思われるからである。しかし、ここで注意が必要なのは、パラメーターが捉えようとしている言語間の差異は、通常思い描かれている差異よりも抽象度の高いものであるということである。例えば、言語間の差異で最も顕著なものとして、ソシュールが「言葉の恣意性」と呼ぶところの語彙の音と意味との関係における差異がある。また、ウオーフの仮説として有名な、言葉の概念が世界をどう切り取っているかということに関する言語間の差異も、その顕著な例の一つである。しかしながら、これらの差異は、言ってみれば、単なる社会的約束事または慣習に帰することができるようなものであり、現在理解されている限りにおいては、 S_0 側に帰せられるような差異とは考えられず、従って、パラメーターは、これらの言語間の差異を捉える装置としては想定されていない。現在想定されているパラメーターは、主要部パラメーターのように、より抽象的な言語の形式に関わる部分での言語間の差異を捉えるためのものである。そうすると、パラメーターが存在するに至った理由を「進化上の偶然の賜物」に帰することが果たして正しいことなのかどうかは、一概に結論付けられるようなものではない。更に注意が必要なのは、パラメーター値の違いによって生じる言語間の差異を、生物学における種間の差異と並行的に考えるのは、正しい対比とは言えないということである。確かに、言語差異全般を考察するのに、それを生物の進化過程を表す系統樹になぞらえて、一つの原始的言語からそれが進化するに従って多様な言語が生じてきたと考えるのは、ある意味

でわかりやすい対比であるかも知れない。しかしながら、この二つのケースでは、一つ重要な違いがある。それは、生物個体が種に分岐した後は、ある種の個体が別の種に成長する訳もなく、種間の違いは遺伝子にはっきりと書き込まれているのに比して、言語の場合には、生まれたばかりの赤ん坊は環境によっていかなる言語も身に付けることができ、従って、言語間の差異は遺伝子の差異に帰せられるようなものではないということである。よって、言語間の差異は、生物種間の差異に並行的というよりはむしろ、種内の差異と並行的に考えるほうが適切であり、更にパラメーターなる装置は、その差異の中でも予め生得的に決められた範囲内での差異を捉えるためのものであり、このような装置が、他の生物個体や生物器官に対応例を見いだしうるかは、私の知りうる限りにおいて、明らかではない。

それでは、出発点に戻って、いかにしてパラメーターが S_0 の構成要素を成すに至ったのであろうか。本稿では、パラメーターは、インターフェイス条件を満たすのに S_0 が取りうる最適な対処法が複数ある場合、その選択肢がそのまま S_0 に組み込まれ、その決定が個々人の言語経験に委ねられたものであることを提案する。そこでまず、インターフェイス条件がいかなる性質を持つものであるのかを考察していきたい。チョムスキーはこの条件を以前は判読可能性条件 (legibility condition) と呼んでいた。この条件が意味するところは、上述したように、FLで生成された「言語知識」の表示物はそれに隣接する認知システムに対して「判読可能」でなければならないというものである。これは、言ってみれば、隣接する認知システムとの関係を保証する最低条件のようなものである。例えば、ある文に対してFLが与える表示が判読可能でなければならないというのは、音声を司るシステムに対しては、その表示がすべて音声解釈の適用を受けるものでなければならない、そういった解釈を許さないような要素が混入してはな

らないということであるし、意味を司るシステムに対しては、その表示がすべて意味解釈可能なものでなければならないということである。しかしながら、別の可能性としては、このシステム間の関係が、より積極的なものであると考えることもできる。即ち、隣接する二つのシステムが FL に要求するインターフェイス条件が単に判読可能であるのみならず、それらのシステムの機能の仕方にある意味で資するように、より特定のな要求を FL に課していると考えることもできる。例えば、省略構文を考えてみる。よく知られているように、日本語では、文脈や状況が整えば、かなり自由に代名詞を省略することができる。例えば、以下の文で、

(6) ジョンは昨日何をしていたの。

(彼は) 図書館で勉強していたよ。

「彼は」は、省略可能であり、もっと言えば、省略したほうがより自然であると言える。それでは、いったい何故このような省略が可能なのであろうか。もし、この代名詞の省略という現象が S_0 によって予め規定された条件によって起きているのだとすれば、その条件は、SMT の下では、(3) に掲げた一般的諸原理かもしくはインターフェイス条件に帰することができる筈である。まず、一般的諸原理に帰するような理由付けを見いだすのは困難である。また、インターフェイス条件を判読可能性条件と規定する限りにおいては、代名詞があろうがなかろうが、(6) の文の表示はそれに隣接するシステムに対して、判読可能性について何ら変わる所はないであろう。そうすると、SMT の下では、この代名詞の省略の現象をうまく説明できないように思われる。 S_0 がこの現象に全く関与していないと考える可能性も全くない訳ではない。その場合には、省略の現象は、単に子供

が経験的に学び取ったものということになるが、これまでの研究で、こういった代名詞の省略の現象には、いわゆる動詞の一致現象がある一定の規則性を有しながら関わっていることが明らかになっており、 S_0 の関与が皆無であると考えerには無理があるように思われる。

この現象を説明するのに、インターフェイス条件を、上述したように、隣接するシステムの機能の仕方にある意味で資するように、より特定のな要求を FL に課すものと仮定する。これまで、この隣接するシステムは、音を司るシステムと意味を司るシステムから成ると述べてきたが、これらのシステムは、協同して言語運用を司る performance system を成している（もしくは、その一部を成している）と仮定されている。この考え方は、Chomsky (1965) のいわゆる competence と performance の区別に由来するもので、FL が competence である言語知識を捉えるものであり、実際の言語運用はこの知識の直接の現れではなく、言語運用を司る performance system が FL を取り込む形で機能し、言語知識はその背後にあって言語運用に間接的に反映されるとするものである。この考え方に基づけば、インターフェイス条件を、「言語運用に資するように performance system が要求するような条件」と解することができる。これを「機能的有用性条件」(Functional Utility Condition) と名付けたい。

(7) **Functional Utility Condition (FUC)**

Performance systems require FL to adapt to and facilitate the functional utilities that serve to the end of language use.

この機能的有用性条件は、チョムスキーが主張する判読可能性条件と共にインターフェイス条件を構成するものと解することができよう。さて、問

題はどのような functional utility が performance system から FL に要求されるかであるが、この時点でアプリアリに言えることはほとんどないが、以下で幾つか具体例を挙げていきたいと思う。前もって一つ注意しておきたいのは、この FUC は最低必要条件である判読可能性条件とは異なり、FL が必ず満たさなければ成らない条件というよりはむしろ、多少比喩的に言えば、performance system が求める functional utility に対して「善処」することを求める条件と言える。従って、可能性としては、performance system が求めるある functional utility に対して、FL がその仕組み上、何の対処も施せないということもあり得る。

さて、上の代名詞の省略の現象であるが、この FUC がインターフェイス条件を構成するものと仮定すると、この現象を生み出すメカニズムが何故 S_0 に組み込まれたのかを、かなり直感的ではあるが理解することができよう。例えば、以下のような functional utility は、言語運用にあたってはごくごく自然のものであろう。

(8) 余計なものは省く。

これに対して、FL がこの有用性を適えるべく、例えば、発音されない pro の存在を語彙部門に認めたり、また、「削除規則」を兼ね備えたりしたものと想像することができる。但し、これらのデバイスは、FL に働く普遍的条件（それは、おそらく (3a) の一般的諸原理から導き出されることが期待されるのであるが）に従うことが求められるので、(8) に掲げた有用性が個々の言語に自由に反映されることにはならない。例えば、Lobeck (1995) では、pro も含めた空範疇にはすべて、“Licensing and Identification Condition” が働くことが提案されているが、もしこの提案が正し

ければ、まさにこの条件によって *pro* が生起できる環境が制限される。このように、FL の構成要素には、FUC の要請を適えるために生じたデバイスが存在するように思われる。また、それと共に、FL 自身には、一般的諸原理から導出されたと考えられる普遍的条件が存在するが故に、ある有用性を適える仕方や程度については、その普遍的条件との関わり方によって、様々な成果を生み出すことが期待される。このような考え方の中でパラメターを考察すれば、その存在理由として最も自然な考え方は、ある有用性について *performance system* より要請があった場合、FL が取りえた最適の選択肢が複数あり得た結果、それをパラメターという形で温存し、それを個々人の言語経験に委ねたとするものであろう。以下では、主要部パラメター (*Head Parameter*) と格・一致パラメター (*Case vs. Agreement Parameter*) を例として、これらのパラメターの存在が、この考え方に従って動機づけが可能であることを示していく。

3 主要部パラメター (*Head Parameter*)

統語構造を決定する二大要素である支配関係と線形関係の間関係付けについては、*Kayne (1994)* の非対称構造が提案されて以来、ある構造上の支配関係はある一定のアルゴリズムによってその支配下にある終端記号列の線形順序を決定するとする考え方が主流である。*Abe (2001)* では、この考え方が *SMT* のような極小理論の基本的スタンスの中でどう位置づけられるかについて、以下のように述べている。

- (9) A “superengineer” who tried to design the FL must have known that both dominance and precedence were essential properties of syntactic objects, since they were required by the two outside cognitive systems.

The superengineer, then, ought to have considered how these relations are encoded into syntactic objects. It is possible that dominance relation was encoded into each syntactic object irrespective of the way precedence relation was encoded into it. Taking into consideration the superengineer's mission according to which he/she was expected to design the FL in an optimal way, it is more likely that the superengineer tried to construct syntactic objects in such a way that dominance relations have a certain correspondent relation with precedence relations.

この引用の中の, “superengineer” とは, (2) のモデルで言えば, Origin of S_0 を (3) に掲げた二つの条件を用いて構築することを目指すエンジニアのことを言う。構造上の支配関係は, ばらばらの単語の意味からいかにしてあるまとまった命題を構成することができるのかという問いに答えるべく, C-I System からの要請として, FL がばらばらの単語を順次つなげる(この操作を Merge と呼ぶ) ことによって, 結果的に生まれてくる。また, 構造上の線形関係は, SM System からの要請として, FL で生成された統語構造物を音形化する必要上生じてくる。従って, 支配関係と線形関係は, インターフェイス条件により必然的に生み出されたものである。すると, 当然, superengineer にとっては, この二つの関係が問題となる。(3i) の一般的原理に従えば, この二つの関係が個々ばらばらに何の関係もなく FL の中に組み込まれたと考えるよりは, ある一定の規則的關係の下に組み込まれたと考えるほうが理に適っている。それでは, いったいどういった関係を想定できるであろうか。Kayne (1994) の LCA がまさにこの関係を捉えるために提案されたものと見なすことができる。簡単にその関係を言えば, 「構造上高いものは先行する」ということになる。これに対して,

Fukui and Takano (1998) では、線形関係を直接支配関係と関係づけるのではなく、FL において Merge によって新たに作り出された統語構成物の label に言及することによって、間接的にその関係を捉えようとするものである。Chomsky (1995) によれば、label という概念は、C-I System の要請として、ある要素が Merge によってくっ付けられたときに、その新たな構成物がいったいどちらの統語的または意味的特性を引き継いでいるのかを明示するのに必然的に要求されるものである。Fukui and Takano (1998) では、この label を手がかりに、ある範疇の直接支配下にある二つの要素のうち、最大範疇 (maximal projection) の方 (=自分の label が投射されていない方) をそうでないものより先行するものと規定し、結果的に、支配関係と線形関係は label の概念を仲立ちとしてある一定の関係を与えられている。Abe (2001) では、この Fukui and Takano (1998) の基本的アイデアを踏襲しつつ、主要部パラメーターの存在を動機づけるために、以下のような提案がなされた。

- (10) When α and β merge to make K, so that K dominates α and β , α precedes β if α is visible and β is invisible.

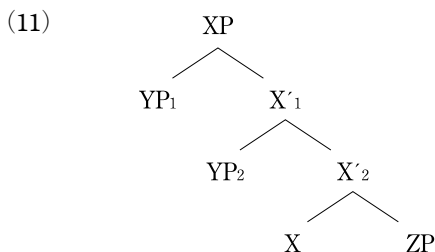
(10) が述べているのは、ある統語構造物 α と β を Merge の操作によってくっ付けた場合に、 α が可視で β が不可視ならば、 α が β に先行するというものであり、この場合、可視か不可視かは、「C-I System において解釈を必要とするものかどうか」によって決まる。これは、Chomsky (1995) によれば、最大範疇と最小範疇が可視であり、途中の投射物 (intermediate projection) は不可視ということになる。従って、この可視か不可視かという決定もまた、label を手掛かりになされている。即ち、label を自身持つ

た範疇がその label を上位範疇に投射した場合、それが不可視であり、それ以外が可視ということになる（最小範疇はそれ自体 label を持たないことに注意）。

構造上の支配関係と線形関係との間に存する対応関係を捉える仕方として、上に三つの提案を紹介したが、次に問題となるのは、どの提案が最も *superengineer* の意図に適ったものであるかということである。これについては、はっきりとした答えは持ちあわせていないが、以下 Abe (2001) の提案を採用して主要部パラメーターの存在理由を議論するのに、この提案を採用する可能な動機付けを試みたいと思う。まず、この三つの提案は、Kayne の提案とそれ以外に大きく分けることができる。上述のように、Kayne の提案は、支配関係と線形関係との間に存する対応関係を直接捉えるものであるのに対して、それ以外の二案は、label の概念を介してその関係を捉えようとするものである。label のような第三の概念を仲介することなしに、直接二つの関係を結びつけている点において、Kayne の提案は他の二案より優れていると考えることもできようが、別の角度から考察すると、他の二案の優秀性を認めることができる。それは、派生的か (derivational)、表示的か (representational)、という問題に関係する。Kayne の案は、ある与えられた階層構造から、あるアルゴリズムに従って、それに対応する終端記号列の線形順序を全体的に導き出すもので、表示的であると言える。それに比して、他の二案は、Merge によって構成された二つの統語構成物の間に、label の概念に依拠したある一定の規則に従って、線形関係を与え、この操作の繰り返しによって、結果的に階層構造全体がある一定の仕方で、線形順序に対応する仕方を取っている点において、派生的であると言える。もし、Chomsky (1995) が主張するように、FL の計算処理システム全体が、派生的特徴を有しているのであれば、Kayne の

案よりは、他の二案の方が、FL 全体の設計に適っていることになる。また、Fukui and Takano (1998) と Abe (2001) の提案を比べると、前者では、ある姉妹関係にある統語構成物の間の線形関係は、単に最大範疇であるかどうかによって決定すると規定されているだけで、その動機づけはなされていないが、Abe (2001) の提案では、その線形関係が、「C-I System において解釈を必要とするものかどうか」という問題と連動させている点において、概念上優れていると言いうるのであろう。この提案によると、C-I System において解釈を必要とするものがそうでないものより線形上前に置かれることになるが、この対応関係は、知覚や認識に関わるメカニズム全般にわたって相通じるようなより根本的な原理の反映であるかも知れない。

さて、superengineer が Abe (2001) によって提案された (10) の規則を支配関係と線形関係との対応関係を捉える最善のものとして採用したと仮定しよう。現在、一般的に認められている多重指定部 (multiple specifier) を持つ構造を例にとりて、(10) の規則がどのように働くのかを具体的に見ていく。



この構造において、 YP_1 と X'_1 、及び YP_2 と X'_2 の間の線形順序は、(10) の規則によって決定される。というのは、 YP_1 と YP_2 は可視であるが、

X'_1 と X'_2 は不可視であるからである。これにより、指定部が構造の左側に位置することになる。これに対して、 X と ZP との間の線形順序については、(10) の規則によっては決定されない。というのは、どちらも可視であるからである。これにより、主要部と補部との線形順序については、この規則によって決定されることがわかる。さて、*superengineer* はこの状況にどう対処するのが最善であろうか。日本語のような語順の比較的自由な言語を考慮に入れると、*superengineer* が取る方策としてまず考えられるのが、主要部と補部との線形順序を未指定のままにし、その間の順序を自由にしておくというものである。しかしながら、興味深いことに、以下の日本語のように、句間の自由な線形順序を認める言語は多数存在するが、主要部と補部との線形順序が自由な言語はほとんど存在しないように思われる。

- (12) a. ジョンがメアりに本をあげた (こと)
b. ジョンが本をメアりにあげた (こと)
c. メアりにジョンが本をあげた (こと)
d. メアりに本をジョンがあげた (こと)
e. 本をジョンがメアりにあげた (こと)
f. 本をメアりにジョンがあげた (こと)

それでは、いったい何故主要部と補部との線形順序が自由であってはならないのであろうか。これには、機能的有用性条件 *FUC* が関わっていることを提案したい。例えば、以下のような *functional utility* が考えられる。

- (13) 主要部の位置を固定する。

これは、直感的に言えば、内なる思考を言葉で表現する際、ある述語の主語とか目的語の現れる順番は、(12)にあるように、固定されていないほうが、ある意味で使い勝手がいいのに比して、中核となる述語自体は、固定されていたほうが、命題の統一性を確保する上で、有用であることを意味する。特に、一命題が別の命題に埋め込まれた複合文を考慮すれば、(13)の有用性はより明らかになるであろう。このような理由で、performance system が FL に (13) の有用性を確保することを要求したと仮定しよう。この FUC に対して、FL が取り得べき最善策は何であろうか。一つ考えられる方策は、主要部と補部の線形順序を恣意的にどちらかに決めてしまうというやり方であるが、この決め方が何の基準にも依拠することなく、恣意的に行われる点において、最善とは言い難いであろう。この問題に対して、superengineer が選んだ解決策が「パラメター」であったと思われる。即ち、主要部と補部の線形順序の決定を S_0 ではパラメターという形で保留し、個々人の言語習得過程において、経験によって決定されるようにしたのである。

Abe (2001) では、この主要部パラメターは語彙範疇には存在せず、機能範疇にのみ存することが主張された。これは、概念上は、Fukui (1995) の以下に掲げる Functional Parametrization Hypothesis に基づくものである。

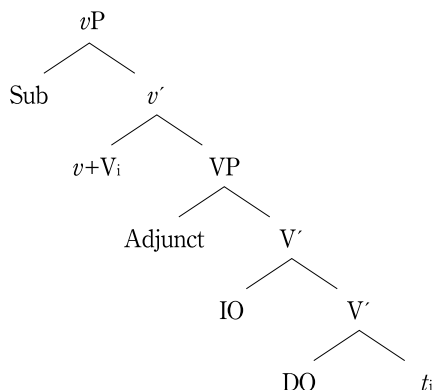
(14) Fukui's (1995) *Functional Parametrization Hypothesis*

Lexical projections are uniform among languages and parametrization is attributed to functional categories.

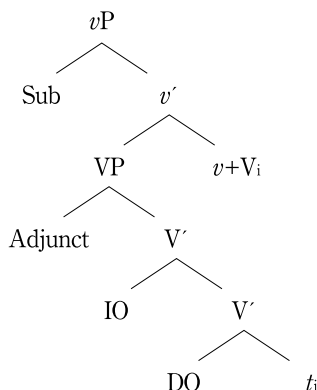
Abe (2001) では、この提案に従い、例えば、英語と日本語の文構造は以

下のようにになると主張されている（以下の構造では TP レベルが捨象されている）。

(15) a. English



b. Japanese



この構造において、VP 内の構造は、(14) に従って、英語も日本語も同一である。この中で、Adjunct と IO は、(10) に従い、それぞれ姉妹関係にある V' に対して線形的に先行する。これに対して、DO と V との線形順序は未決定のままである。Abe (2001) では、Larson (1988) 以来、いわゆる V-shell 構造に対して仮定されてきた V-to-V raising を採用し、V は *v* の所に強制的に繰り上げられるとした。これによって、DO と V との線形順序を決定する問題が回避される。機能範疇である *v* は、V とは異なり、主要部パラメターを内蔵している。この値が決定されることにより、英語では、(15a) のように *v* が VP に先行し、日本語ではその逆となる。*vP* の主要部に位置する主語が *v'* に対して先行するのは、(10) による。

本稿の主旨から言えば、主要部パラメターが、語彙範疇や機能範疇の如

何を問わず、すべての主要部に内蔵されていると主張しようが、Abe (2001) のように、機能範疇にのみ主要部パラメターが存すると主張しようが、さほど影響はない。問題は、(14)に掲げられた Fukui (1995) の仮説がどれほど概念的・経験的支持を得られるかということになるが、本稿で提案されているパラメターの位置づけからの観点では、この仮説に対して何ら新たな視点を提供するようには思われぬ。従って、上で Abe (2001) の提案を紹介したが、この提案は、本稿のパラメターの位置づけからの必然的帰結ではなく、単に Fukui (1995) の仮説との関係において有力視されるものに過ぎないことを付言しておく。

上で、主要部パラメターは、「主要部の位置を固定する」という functional utility に対する FL の最善策であるという提案を行ったが、この functional utility が FUC として FL に働き掛けているという提案は、付加構造の現れ方によって更なる支持を得られる。Saito (1985), Fukui (1993), Saito and Fukui (1998) では、付加の仕方が X' 理論によって制約を受けることが主張されている。とりわけ、Fukui (1993), Saito and Fukui (1998) では、付加の方向が、以下の X' 鑄型が示すように、主要部が位置する側とは反対側でなければならないと主張する。

- (16) a. X' → X/X' YP
 b. X' → YP X/X'

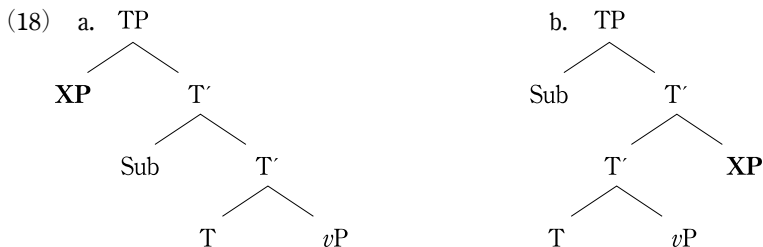
(16a) は、英語のような主要部が先行する言語では、右方付加しか許さないことを示し、(16b) は、日本語のような主要部が後にくる言語では、左方付加のみ許すことを示している。もしこれらの条件が付加構造の一般的制約として正しいものと見なせるのであれば、これらの条件は、(13) に

掲げられた「主要部の位置を固定する」という functional utility に対して、その解決策として superengineer が課した条件と見なすことができる。というのは、(16)によって課せられる条件は、主要部の位置を常に左端か((16a)の場合)右端に((16b)の場合)に限定する働きを持っているからである。

ちなみに、付加構造がそもそも何故 S_0 に組み込まれたのかを考えると、これに対しても FUC が関わっていると考えるのが自然であろう。この場合関係する functional utility は以下のようなものであろう。

(17) ある特定の表現を強調する。

この functional utility に対して FL が採用した解決策は複数考えられるが、その一つとして編み出されたのが、文の両端を強調表現のために担保するやり方であろう。そして、付加構造はこの強調表現の位置を担保するために superengineer が考案したものと考えることができる。Abe (2001) では、この付加構造が経験的に必要と認められるのは、機能範疇のレベルにおいてであり、語彙範疇のレベルにおいては、Fukui and Speas (1986) によって主張されたように、付加と代入(substitution)の区別は必要がないことが示されている。ここにその詳細を再掲することはしないが、もしこの主張が正しければ、強調表現用の位置は、機能範疇にのみ担保されていることになる。仮に TP をその例に取れば、英語のような主要部が先行する言語の強調表現用の位置は、左端は(18a)に示すように多重指定部を利用でき、右端は(18b)のように付加構造を利用できる。



これに対して、日本語のような主要部が後にくる言語においては、強調表現用の左端の位置は、英語の場合同様、(18a)のように、多重指定部を利用するか、左方付加構造を利用することができるが、右端の位置は担保できない。この言語では、右方付加構造を用いることができないことを思い起こしてほしい。それでは、こういった言語では強調表現用の位置が右端には担保されていないのであろうか。以下の日本語の例文において、

(19) ジョンはメアリが愛している。

(20) ジョンは愛しているよ、メア리를。

(19)の文では、「ジョンは」という強調表現が文の左端に位置しているのに対して、(20)の文では、「メア리를」という強調表現が文の右端に位置しているように思われる。このことは、主要部が後にくる言語においても右端が強調表現用に担保されていることを示唆しているように思われる。しかし、このことは、こういった言語でも、英語のような主要部が先行する言語同様、右方付加構造を許すことを意味する訳ではない。Abe (1999), Tanaka (2001)によれば、(20)は以下のように二文から構成され、後の文には削除表現が関わっているとされる。

(21) [ジョンは pro_i 愛しているよ] [メアリ_i を [e]]

もしこの分析が正しければ、日本語のような主要部が後にくる言語では、強調表現用の右端の位置を確保しているものの、それを背後で支える構造は、英語のような主要部が先行する言語とは異なり、例えば、(21) のような付加構造制約には違反しないものが採用されていると考えられる。ここにも、*superengineer* が、「ある特定の表現を強調する」という要請に対して、FL 内で許された手駒を用いて、その最善策が用いられていることを見て取ることができる。

4 自由語順の有無：格・一致パラメター

本節では、日本語のように自由語順を許す言語（(12) を参照のこと）と英語のようにそうでない言語との差異を捉えるパラメターを考察する。まず、自由語順をどう文法が捉えるかであるが、Saito (1985) 以来、スクランプリングと呼ばれる移動規則によって捉えるのが定説となっている。この方式によれば、自由語順を許す言語であっても、基底語順が存在し、他の語順はこの基底語順からスクランプリングによって派生される。例えば、(12) の例文において、基底語順を呈しているのは、(12a) であり、その他の文は、以下に示されるように、スクランプリングが関わっている。

- (22) a. ジョンがメアリに本をあげた (こと)
 b. ジョンが [本を]_i メアリに t_i あげた (こと)
 c. [メアリに]_i ジョンが t_i 本をあげた (こと)
 d. [メアリに]_i [本を]_j ジョンが $t_i t_j$ あげた (こと)
 e. [本を]_i ジョンがメアリに t_i あげた (こと)

f. [本を]_j [メアりに]_i ジョンが t_i t_j あげた (こと)

近年の移動理論では、ミニマリスト的精神に従って、あるものを移動する場合には、その trigger が問題となる。以前であれば、移動規則の適用自体は自由だが、その結果派生された表示に制約を課すことによって、文法的な文と非文法的な文を振り分けていたが、極小理論では、派生や表示を極力最小限に抑えるという考え方の下に、移動の適用は、その移動が「合法的」(legitimate) 派生のために是非とも必要である場合に限られる。チョムスキーがこの合法的派生のための trigger として提案したのが、解釈不可能な素性 (uninterpretable feature) である。いわゆる A 移動では、 ϕ 素性と格素性がこの役割を担い、A' 移動では、wh 素性などがこの役割を担っている。このような観点から、自由語順を捉えるためのスクランプリングを考察すると、trigger として働く適当な素性が見当たらない。むしろ、この移動規則は適用が自由であると見なす方が、その機能を端的に捉えているように思われる。このような理由で、チョムスキーは、少なくとも *Aspects* (Chomsky 1965) の頃から、スクランプリングは、FL の中核にある計算処理部門で働くのではなく、音韻部門での stylistic rule に相当するものと見なす傾向があった(最近の著作では、Chomsky (2001) を参照のこと)。しかしながら、Saito (1985) がスクランプリングは Move α に還元されると主張して以来、様々な研究者によって、スクランプリングが、他の移動規則同様、例えば、束縛条件の適用やスコープの解釈に影響を与えることが、実証されてきた。従って、スクランプリングを stylistic rule と見なすというチョムスキーの主張は、経験的には支持されず、計算処理システムの中で働くとするのが、妥当な結論であると思われる。それでは、極小理論の中で、スクランプリングという操作をどう捉えればよいのであ

ろうか。

この問題を扱うのに、まず指摘しておかなければならないのは、英語のように、一般的に自由語順を許さないと見なされている言語においても、ある限られた領域では、そういった現象が実際に見られるという事実である。Takano (1996, 1998) では、以下の例文において、(23a) が基底語順を呈した文であり、(23b) はこの基底語順から *about Mary* をスクランプリングによって移動することによって派生された文であると主張されている。

- (23) a. I talked to John about Mary.
b. I talked about Mary to John.

この主張は、以下の束縛関係における再構築効果 (reconstruction effects) の有無によって支持される。

- (24) a. I talked to the boys about each other's mothers.
b. I talked to every boy_i about his_i mother.
(25) a. *I talked to each other's mothers about the boys.
b. *I talked to his_i mother about every boy_i.
(26) a. ?I talked about the boys to each other's mothers.
b. I talked about every boy_i to his_i mother.
(27) a. ?I talked about each other's mothers to the boys.
b. ?I talked about his_i mother to every boy_i.

(15) に掲げられた構造のように、語彙範疇である VP 内の構造が左上がりであれば、(24) と (26) の文の容認性は容易に説明がつく (この場合、P

は c-command を妨げないことが前提とされなければならないが)。問題は、(25) の文に例証されているように、IO-DO の語順では、DO から IO への束縛関係は成立しないが、(27) の文に例証されている通り、DO-IO の語順では、IO から DO への束縛関係が成立するのは何故かということである。Takano が主張する通り、基底語順が IO-DO で、DO-IO の語順は、この基底語順からスクランプリングによって派生されると仮定すれば、(27) の文の容認可能性は、束縛関係の再構築効果によるものと説明がつく。この観察に基づき、Takano は以下の仮説を打ち立てている。

(28) Short scrambling is universally available.

この仮説が事実を正しく把握しているものと仮定した場合、いったい何故このことが成立するのであろうか。

S_0 内にスクランプリングというオプションが備わっているという事実は、矢張りこの場合にも、FUC が関わっていると考えるのが自然である。この場合関係する functional utility は、以下のようなものであろう。

(29) 語順を自由にする。

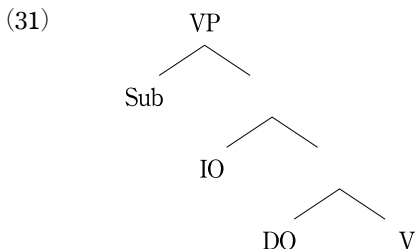
前節において、「主要部の位置を固定する」という functional utility が存在し、それが主要部パラメターを生み出す基となったことを述べたが、(29) に述べられた functional utility は、これとは逆の要請を FL に行く。動詞、主語、目的語を例に取り、その意味するところを直感的に述べれば、これらの要素からなる思考内容を言語システムを通じて表現しようとした場合、主語と目的語については、思いつくがままの順番で、主語が先でも目

的語が先でも、その命題を表現できる FL の方がそうでないものより使い勝手が良いのに対して、主要部である動詞については、ある決められた位置に置かれるように FL によって決定されていたほうが、使い勝手が良いであろうというものである。こういった functional utility が存在するものすると、次に考察しなければならないのは、FL が FUC に従って、(29) の functional utility にどう対応したかである。可能性は二つ考えられる。一つは、句構造を構築する段階において、主語—目的語及び目的語—主語の語順を両方許すシステムを考案することであり、もう一つは、句構造を構築する段階においては、ある固定された基底語順が存在し、自由語順は、Move によって捉えようとするものである。上に述べたように、これまでの研究から、後者のオプションが FL では採用されている。それは、いったい何故であろうか。考えられるのは、以下のような投射原理の存在である。

(30) Projection Principle

The way a lexical head projects reflects its thematic hierarchy.

項を取る述語の一般的特性として、thematic hierarchy が存在することが確立されているものと仮定すると、superengineer が、ある述語にまわりつく項が構造に現れる仕方として、この thematic hierarchy とある対応関係を保つように条件づけたと考えるのは、ごく自然なことである。即ち、thematic hierarchy の高低が、構造上の高低に対応するように。そうすると、例えば、VP 内の構造は V の thematic hierarchy に従って、以下のような構造が生み出されるであろう（この構造では、VP と *v*P の区別を捨象している）。



このように、投射原理が存在すると、語順の自由を確保するためには、Move というオプションに頼らざるを得ない。

この語順の自由を確保するための移動規則がスクランプリングであるが、superengineer は、この規則に対して何か制限を課してはいないであろうか。少なくとも二つのごく自然な制約が思い浮かぶ。一つは、Hoji (1985) で観察されたように、スクランプリングは string-vacuous な適用を許さないということである。これは、スクランプリングのそもそもの存在理由を考えれば、「余分な派生はしない」という最適性の条件から自然に導き出されるものであろう（この制約をある種の経済性条件によって捉えようとする試みについては、Abe (1993) を参照のこと）。もう一つは、同一性条件 (Identification Condition) とでも呼ぶことができるもので、この条件が要求するのは、「スクランプリングの適用を受けるものには、自分の同定を可能にする印がなければならない」というものである。この条件の動機づけを考えれば、それが FUC によるものだと考えるのが自然であろう。例えば、以下のような functional utility が考えられる。

(32) それぞれの要素の意味役割が同定できる。

この **functional utility** に対して, **superengineer** が取った方策として考えられるのは二つである。即ち, 相対的位置 (**positioning**) による同定と何か目印による同定である。相対的位置による同定とは, 例えば, (31) の構造において, 投射の原理により, ある特定の階層順位が与えられれば, (10) の写像規則により, Sub-IO-DO の間にはある一定の語順が導き出されることになり, この写像関係を用いて, 逆にその相対的位置からそれぞれの要素の意味役割を同定するものである。これに対して, 目印による同定とは, 例えば, (22a) の日本語の例文のように, 「～が・に・を」のような格助詞等を用いた同定の仕方のことを指す。この目印による同定には, 他に前・後置詞によるものも含まれる。例えば, (23a) の英語の例文において, **to John, about Mary** それぞれの意味役割は, **to, about** という前置詞によって明示されている。この二つの同定の仕方は, それ自体を比較した場合, どちらがより優れたやり方かを決定するのは困難であり, 従って, **superengineer** はこの二つのやり方を温存したと考えるのも不思議ではないであろう (後に, この二つのやり方が機能範疇においてパラメーター化されていることを述べる)。但し, そうは言っても, この二つの同定の仕方が, 何の制限もなくいつでも利用できるという訳ではなく, その同定の仕方の違い故に, 異なった制約に従うこととなる。その一つが, 上述のスクランプリングに課される同一性条件である。いったんスクランプリングが FL のオプションとして認められると, 相対的位置による同定を必要とする要素に対してこの規則を適用した場合, 同定が不可能になる。故に, (32) に掲げられた **functional utility** を保持するためには, 同一性条件が必要となる。

上述の Fukui (1995) の **Functional Parametrization Hypothesis** がもし正しいとすれば, 少なくとも VP のような語彙範疇内では, 前段落で述べた条件を満たす限り, スクランプリングがどの言語においても利用可能である

ことが期待される。従って、上の主張は、(28) で述べられた Takano (1996, 1998) の「短いスクランプリングは普遍的に利用可能である」という仮説に概念的裏付けを与えるものである。

さて、次に考察しなければならないことは、英語のように VP 内でしかスクランプリングを許さない言語と、日本語のように広範囲にスクランプリングを許す言語とでは、何にその違いを帰することができるかということである。Fukui (1995) の仮説に従えば、機能範疇の働きの違いに帰するのが最も自然な考え方である。Fukui (1986) によれば、機能範疇の主たる働きは、指定部—主要部関係による一致 (agreement) を引き起こすことであり、日英語の様々の違いは、この一致を引き起こす機能が欠けている (defective) かそうでないかというパラメーターに帰することができるかと主張されている。Kuroda (1988) も、ほぼ同様の知見に基づき、一致の有無が日英語の様々の違いを生み出していると主張し、その中で、スクランプリングの有無もこの一致に関するパラメーターから導き出されることが主張されている。ここでは、これらの知見を基盤として、日英語のスクランプリングに関する違いを、FUC を用いて説明を試みたい。まず初めに考察しなければならないのは、いかにして一致という仕組が FL に取り込まれるようになったのかということである。上の議論から、(32) に掲げる「それぞれの要素の意味役割が同定できる」という functional utility の要請への対応として、相対的位置による同定の一装置と見なすのが最も自然であろう。この一致による同定は、大きく二種類に分けられる。一つは、指定部—主要部関係による一致であり、Chomsky (2000) の理論では、AGREE と EPP checking のコンビネーションによって導き出されるものである。もう一つは、Chomsky (2000) の理論で言えば、単に AGREE の操作のみによる一致であり、指定部—主要部関係による一致ほど局所的にその相対

的位置関係を固定する訳ではないが、その操作に適用する最小性条件 (minimality condition) の故に、AGREE の関係にある二つの要素の相対的位置が間接的に決定されるものである。前者の例が、英語の主語と Tense の関係であり、後者の例が、英語の目的語と *v* との関係である。何故このように一致による同定が二種類存在するかについては、今のところはっきりしたことはわからないが (当然ながら何らかのパラメーターが関わっていると思われるが)、いずれにせよ、一致を相対的位置関係による同定の一装置だとすれば、何故一致の有無についてパラメーターが存在するかが理解可能となる。というのは、前述した通り、(32) に掲げる「それぞれの要素の意味役割が同定できる」という functional utility の要請に対して superengineer が用意した対処法は二つあり、本稿のパラメーターに関する仮説に従えば、その対処法がいずれも最適と考えられる場合に、その二つの間の選択を個々人の経験によって決定するようにしたのがパラメーターであるからである。この場合の二つの対処法とは、相対的位置による同定と目印による同定であるが、目印による同定のうち、前・後置詞によるものは、おそらく、その意味的役割の故にどの言語にもあまねく見られる特性と考えられるので、ここで対照されるべき対処法とは、純粹に文法現象と見なしうる一致と格と考えることができる。故に、ここで問題となっているパラメーターを、格・一致パラメーター (Case vs. Agreement Parameter) と呼ぶのが最適であろう。

このパラメーターにおいて、格による同定の値が選択された場合、一致という機能範疇の本来の機能が失われることになるので、Fukui (1986) の意味において、機能範疇は defective ということになる。この欠格性から何が導き出されるかと言えば、Fukui (1986) が主張した通り、結局、機能範疇はその本質的特徴を失っていることから、語彙範疇と何ら区別される所

は無くなるということである。このことから更に、語彙範疇内にて認められていたスクランプリングという操作は、機能範疇のレベルにおいても、上述のスクランプリングに課される条件を満たす限り、自由に適用できるということが帰結される。これによって、何故、日本語のような言語では、主語を飛び越えるようなスクランプリングや、はたまた、長距離スクランプリング (long distance scrambling) が許されるのかを説明したことになる。

これに対して、格・一致パラメターの一致による同定の値が選択された場合はどうであろうか。この場合には、機能範疇の本来の機能が保たれているので、例えば、その機能を妨害するような操作は排除されることとなる。上で見たように、一致とは、ある機能範疇の主要部とその指定部の関係や、主要部とある局所の関係にある句との関係を利用して、(32) の functional utility に資するべく考案された装置である。従って、例えば、一致とは全く無関係の句がある機能範疇の指定部にたまたま収まった場合、この functional utility を満たすという役割を一致が果たせなくなってしまう。故に、機能範疇の指定部の位置には、この一致による同定に関与しない句は生起できないことになる。但し、機能範疇の働きは一致に限られている訳ではないので、厳密には、この言い方は正しくない。前節で、英語のような主要部が先行する言語では、機能範疇の左端と右端が強調表現のために用いられることを主張した ((18) の樹形図を参照のこと)。もしこの主張が正しければ、機能範疇は一致による同定のみならず、強調表現を同定するための機能も担っていることとなる。従って、制限されるべき状況とは、こういった機能範疇の同定機能とは全く無関係の句が、この機能範疇内に忍び込んでその指定部なり付加位置を占めることである。こういった同定機能が、チョムスキーによって提案された素性照合 (feature

checking) によってなされるとすれば、今問題となっている制約は以下のように述べることができる。

- (33) A functional head requires a phrase with a designated feature in its non-complement domain.

スクランプリングという操作は、こういった同定機能とは無関係であることから、素性照合を伴わない移動規則と見なすのは、ごく自然なことである。そうすると、(33) の条件により、機能範疇がその本来の働きを成している言語では、機能範疇内へのスクランプリングは許されないこととなる。これによって、英語のような言語では、スクランプリングは VP のような語彙範疇内に限られることとなる。

上の主張を裏付けられると思われるデータを以下考察したい。Saito (1983) は、日本語に抽象格付与が働いているかどうかを検証するために、“Case marker drop” と呼ばれる現象を考察している。Saito (1983) によれば、日本語の目的格は動詞による格付与が抽象レベルで働いているので、格標識の「を」を欠落させることができる。以下の例を参照のこと。

- (34) a. ジョンが誰 なぐったの？
b. ジョンに何 渡したの？ (Saito 1983, p. 254)

この現象は、上で仮定された格・一致パラメターの観点からすると、日本語では、基本的には格による同定の値が選択されているものの、目的格については英語のように一致による同定も可能であることを示唆する。ちなみに、Saito (1983) では、“Case marker drop” が主格には適用しないこと

が主張されているが、それを裏付けるとされるデータはそれほどはっきりしてはいない。以下の例を参照のこと。

(35) (*) 誰 来たの? (Saito 1983, p. 252)

Saito (1983) はこの文を非文法的としているが、私の判断ではそれほど容認性が低いとは思われない。この現象の一般化としては、主格と目的格の違いというよりは、「動詞の直前の名詞句が格を欠落させることができる」というのが正しいように思われる。以下の例を (35) と比較してほしい。

(36) ?? 誰 メアリをなぐったの?

この一般化が本当に正しいのかどうか、また、正しいとした場合、何故そのような一般化が成り立つのかといった問題について、更に深く考察する必要はあるが、このような制約が日本語の“Case marker drop”という現象に働いているということは、日本語が格・一致パラメターについて、基本的に格による同定の値が選択されていること、そして、一致による同定はあくまでも有標の手段であることを示唆していると思われる。

いずれにせよ、日本語で“Case marker drop”という現象が一致による同定を具現化しているとする上の見方は、様々な経験的予測を導きだす。上で、日本語では格による同定の値が選択されている結果、機能範疇が本来の働きを失い、その結果として、スクランプリングが可能になったことを思い起こしてほしい。これが正しいとすると、格が欠落した名詞句はスクランプリングの適用を受けられないことを予測する (Saito (1983) も Case adjacency の観点から、同様の結論に達している)。というのは、そ

のような名詞句は一致によって同定される必要があり、その結果、機能範疇がその操作に関与する必要があるからである。以下の例文を比較すれば、この予測が正しいことがわかる。

- (37) a. ジョンがメアリをなぐったよ。
b. ?ジョンがメアリ なぐったよ。

- (38) a. メアリをジョンがなぐったよ。
b. ?*メアリ ジョンがなぐったよ。

更に極端な例として、以下の例を考察してほしい。

- (39) ??メアリ ジョン なぐったよ。

この例文は、主語名詞句と目的語名詞句の両方の格が欠落しているため、容認度は落ちるが、より重要な事実、この文を「メアリをジョンがなぐったよ」とは解釈できず、「メアリがジョンをなぐったよ」という解釈しか許さないということである。

更に、(38b) や (39) のように目的語のスクランプリングによる移動は許されないが、話題化 (topicalization) や wh 移動のように、機能範疇によって認可される移動であれば容認されることが予測される。ということは、(38b) や (39) を「メアリはジョンがなぐったよ」のように解釈すれば文法的になるということであるが、私の判断では予測通りのように思われる。また、(38b) や (39) を以下の文と比較してほしい。

- (40) a. (?*) 誰 ジョンがなぐったの? (Saito 1983, p. 254)
b. ? 誰 ジョン なぐったの?

Saito (1983) は (40a) に ?* の容認性を与えているが, (38b) と比較すると容認性は上がると思われる。また, (40b) では, (39) とは異なり, 「誰がジョンをなぐったの」という解釈のみならず, 「誰をジョンがなぐったの」という解釈も可能と思われる。

また, “superiority” の名でよく知られているように, 英語などでは, 文中に二つ以上の wh 句が存在する場合には, 構造上高い位置にある方の wh 句を移動する必要がある。以下の例を参照のこと。

- (41) a. Who hit who?
b. *Who did who hit?

この現象に対しては, 機能範疇である C が wh 素性の照合のために AGREE を適用する場合, 最小性条件により, C により近い wh 句を AGREE のターゲットしなければならないという説明を与えるのが標準的である。そうすると, (40a, b) のように, 格を欠落した wh 句は同様の条件に従うことが期待されるが, Saito (1983) がまさにそのようなデータを提示している。

- (42) a. 誰が誰 なぐったの?
b. * 誰 誰がなぐったの? (Saito 1983, p. 254)

また, 上の (40b) と以下の文を比較すると,

(43) ?? 誰 誰 なぐったの？

この文は、(39)と同様、「誰が誰をなぐったの」という解釈のみ可能と思われる。これらの例は、格を欠落した wh 句が、英語のように、wh 移動の適用を受けて機能範疇 C と一致によって認可されていることを強く示唆する。

参 考 文 献

- Abe, Jun : 1993, *Binding Conditions and Scrambling without A/A' Distinction*, unpublished Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Abe, Jun : 1999, 'On Directionality of Movement : A Case of Japanese Right Dislocation', unpublished ms., Nagoya University.
- Abe, Jun : 2001, 'Relativized X' -Theory with Symmetrical and Asymmetrical Structure', in *Minimalization of Each Module in Generative Grammar*, Kiban-Kenkyu (B) (2) Research Report, Graduate School of Humanities and Informatics, Nagoya University, pp. 1-38.
- Chomsky, Noam : 1965, *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam : 1995, 'Categories and Transformations', in Noam Chomsky, *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, pp. 219-394.
- Chomsky, Noam : 2000, 'Minimalist Inquiries : The Framework', in R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka (eds.), *Step by Step : Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, pp. 89-155.
- Chomsky, Noam : 2001, 'Derivation by Phase', in M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale : A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, pp. 1-52.
- Chomsky, Noam : 2004, 'Beyond Explanatory Adequacy', in A. Belletti (ed.), *Structures and Beyond : The Cartography of Syntactic Structures*, Vol. 3, Oxford University Press, Oxford, pp. 104-131.
- Fukui, Naoki : 1986, *A Theory of Category Projection and Its Applications*, Ph.D. dissertation, MIT. Revised version published as *Theory of Projection in Syntax*, CSLI Publications (1995), Stanford, California, distributed by University of Chicago Press.
- Fukui, Naoki : 1993, 'Parameters and Optionality', *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.
- Fukui, Naoki : 1995, 'The Principles-and-Parameters Approach : A Comparative Syntax of English and Japanese', in M. Shibatani, and T. Bynon (eds.), *Approaches to Language Typology*, Clarendon Press, Oxford, pp. 327-371.

- Fukui, Naoki and Margaret Speas : 1986, 'Specifiers and Projection', in N. Fukui, T.R. Rapoport, and E. Sagey (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics 8*, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Massachusetts, pp. 128-172.
- Fukui, Naoki and Yuji Takano : 1998, 'Symmetry in Syntax : Merge and Demerge', *Journal of East Asian Linguistics 7*, 27-86.
- Hoji, Hajime : 1985, *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, unpublished Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Kayne, Richard : 1994, *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Kuroda, S.-Y. : 1988, 'Whether We Agree or Not : A Comparative Syntax of English And Japanese', in W.J. Poser (ed.), *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, CSLI, Stanford, pp. 103-143.
- Larson, Richard : 1988, 'On the Double Object Construction', *Linguistic Inquiry 19*, 335-391.
- Lobeck, Ann : 1995, *Ellipsis : Functional Heads, Licensing, and Identification*, Oxford University Press, Oxford.
- Saito, Mamoru : 1983, 'Case and Government in Japanese', in M. Barlow, D.P. Flickinger, and M.T. Wescoat (eds.), *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics*, Stanford Linguistic Association, Stanford University, pp. 247-259.
- Saito, Mamoru : 1985, *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*, unpublished Ph.D. dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru and Naoki Fukui : 1998, 'Order in Phrase Structure and Movement', *Linguistic Inquiry 29*, 439-474.
- Takano, Yuji : 1996, *Movement and Parametric Variation in Syntax*, unpublished Ph.D. dissertation, University of California, Irvine.
- Takano, Yuji : 1998, 'Object Shift and Scrambling', *Natural Language and Linguistic Theory 16*, 817-889.
- Tanaka, Hidekazu : 2001, 'Right-Dislocation as Scrambling', *Journal of Linguistics 37*, 551-579.